

# タイ東北部ムン川流域の魚類保全区とその周辺における

## 魚類相と生態に関する研究

平成 27 年入学  
派遣先国：タイ王国  
中田 依里

キーワード：東北タイ（イサーン）、ムン川、魚類、生態、保全区、氾濫原環境、ダム湖

### 対象とする問題の概要

メコン川最大の支流であるムン川（図 1）では、魚類の繁殖地や餌場が多数みられる。中でもパーブンパーターム（写真 1）と呼ばれる浸水林は、雨季になると水没する氾濫原（一時的水域）環境であり、魚類の産卵や稚仔魚の生育にとって重要な場であると言われている。しかし、魚類の繁殖に適した環境は近年の開発によって失われつつある。シーサケット県ラーシサライ郡のラーシサライダム（写真 2）は、1993 年にムン川に建設された灌漑用のダムであり、平地に広いダム湖が形成され、多くの浸水林が恒常的に水没してしまった。一般的に、ダムが建設されると、そこでの魚類の生息数は減少し、魚類相も大きく変化する。地域住民はダム湖の一部を魚類保全区（写真 3）とし、禁漁区に設定している。このような保全区はいくつかあるが、精霊の住むとされる森や寺院の前といった宗教・社会的要因によって区域が選定されており、魚類の生態に配慮した保全区は未だない。

### 研究目的

ムン川に生息する魚類の多くは、繁殖地・餌場を求めて、また成長段階に伴って生息環境を移動する回遊という行動をとる。このため、保全区を設定する際、淵など特定の生息環境のみを選定するだけでは不十分であり、魚類の生態や行動範囲を踏まえる必要がある。しかし、この地域の魚類相や生態に関する情報はほとんど明らかになっていない。地域住民の知見はあるものの、異なる種を同じ地方名で呼んでいるケースなどがあり、統一された見解はない。そこで本研究は、保全区とその周辺の魚類相とその生態を科学的に解明し、有効で持続的な保全活動の一助となることを目指す。とりわけ今回は浸水林が喪失したダム湖内で、現在魚類がどのように繁殖しているのかに着目する。

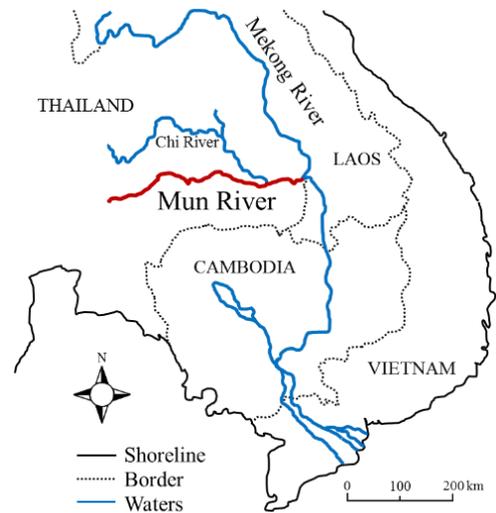


図 1 ムン川の位置



写真 1 パーブンパーターム（浸水林）



写真2 ランサライダム



写真3 黄色い旗で示された保全区



写真4 パーヨン

## フィールドワークから得られた知見について

今回は乾季である2015年11月と2016年2月に現地で魚類の採集を行った。得られた標本は、カセサート大学に持ち帰り同定した。調査場所には、ダム湖内の保全区と隣接する水田、標高が高いために水没せずに残された浸水林に加えて、比較対象としてダム湖から少し離れた開発の進んでいない浸水林などを選定した。雨季である8月に行った採集と今回の計3回の調査結果を比べると、成魚に関しては魚類相に大きな差はないように思われたが、稚仔魚に関しては雨季にはコイ科魚類、乾季にはナマズ科魚類の稚仔魚がよく採集される傾向があった。今回、コイ科魚類は岸部近くの浅瀬や水辺植生内、浸水林で得られたが、ナマズ科魚類は岸辺から離れた水深のある植生の少ない場所で採集された。これらのムン川の魚類の生態に関する調査結果を、住民の知見を踏まえて考察することが必要である。たとえば、中型のナマズであるパーヨン (*Pa Yon : Pangasius macronema*) (写真4) について、産卵生態について、水の流れている倒木の下で産卵をするという地域住民の知見がある。また、過去には回遊を行っていたが、ダム建設後は回遊しなくなったと言われている。採集調査では、パーヨンの稚魚、幼魚とみられる個体群がそれぞれ11月、2月に保全区内で見られた。パーヨンは止水域となったダム湖内でも住民の知見にあるような環境を見つけた、あるいはこの環境に適応し、止水域での繁殖を可能にしたのではないかと考えられる。また、ダム湖建設後、魚類が抱卵している期間が長くなったという住民の知見が得られた。これは水位変動が乏しい、または降雨量と反比例するといった自然界と逆転したダムの環境が、魚類の産卵に影響を与えているのだと考えられる。これらの仮説を確かめるため、さらなる採集調査、とりわけ雨季の調査を今後も行っていきたい。

## 今後の展開・反省点

今回の調査で行った標本の同定とその確認、各魚類のスケッチを今後も引き続き行う。また、調査地の環境と採集された魚種を照らし合わせることで、その種が好む環境を判別する。反省点としては、タイ語を十分に習得しておらず、聞き取り調査に当たっては同行してくださった方に頼らざるを得なかった点が挙げられる。今後は自ら現地住民の方々に調査補助を頼んだり、インタビューができるようにタイ語の習得に励みたい。